

信濃川 水辺の楽校 つまりっ子ひろば

●ヒバリ



●コゲラ



# 信濃川の野鳥 観察ガイド



●キセキレイ



●トビ

## 稀に見ることができる鳥



●カンムリカイツブリ

スズメ位の大きさで、頭部の紅色が特徴である。アラスカなどで繁殖し、北海道では大群で枯草の種をついばむことが見られるが、十日町地区へは冬の鳥として飛来するものの、数は少なく確認することが難しい。



●オジロワシ

冬に北から越冬のため飛来し、3月中旬まで水辺に羽根を休める。

くちばしが大きく、ヘラ状になっているので他のカモと見間違えることはない。

小千谷市の山本山調整池で多数確認されることがあるが、十日町地区ではごく稀にしか見ることができない。

大型のカイツブリで、主に冬に見られるが数は少ない。流れのゆるやかな水辺に降り立つ。

カンムリカイツブリの仲間は、小型のカイツブリやハジロカイツブリと同様に水面から潜水して、小魚等を取り、エサとしている。



●ベニヒワ

大きさはトビよりも大きく、国の天然記念物に指定されており、数も大変少ない。成鳥になると、名前のとおり尾羽が白く、飛翔するときの白い尾が美しい。

毎年11月中旬に北から渡ってきて、3月まで本州で過ごす。中里村宮中のえん提では、2~3羽が毎年越冬し、下条の栄橋付近までの信濃川をエサ場としている。



●ハシビロガモ

# 信濃川の四季の鳥

信濃川で記録または観察されている鳥類は78種になる。そのうちカイツブリ・カモ類・サギ類などの水鳥が見られるが、大河信濃川にも関わらず、十日町地区で確認できる水鳥は少ない。

しかし水鳥には含まれないが、水辺で生活するセキレイ類やカワセミ類、さらに、魚食性の強いオジロワシ・オオワシなどのワシタカ類もまた信濃川と深くかかわって生活している鳥である。

また、つまりっ子ひろばのように、信濃川右岸はハリエンジュから成る広い河川敷があり、しかも段丘林が川岸まで迫っているため、シジュウカラ・ホオジロ等の小鳥のほか、アカゲラ・コゲラなどのキツツキ類、山地性の鳥類を含めて多くの陸鳥類を観察することができる。



●ホオジロ

～春～

長かった雪のなかでの生活も信濃川の流れからいち早く春めいてくる。気の早いホオジロはハンノキのてっぺんでさえずりはじめ、まぶしい青空にはヒバリの歌がきこえてくる。ネコヤナギの白い毛綿も日に日にふくらんでいる。遠い南の国から渡り鳥たちが帰ってくる。



●セグロセキレイ

～夏～

流れにすむ小魚を狙ってカワセミが宝石のようなひすい色の羽根を羽ばたかせ、水の中に飛び込む。チョコレート色をしたカワガラスは水に潜りながら、川底の水生昆虫をあさっている。浅瀬の石の上ではキセキレイ・セグロセキレイたちが長い尾を上下に振りながらチツ、チツ、ジョイ、ジョイ…とさえずる。



●マヒワ

～秋～

アキグミの実が赤く色づく頃になると北から南へ渡る途中の鳥たちが河原のヤナギやハリエンジュの林で羽を休める。木々の葉が落ち、ススキの穂が波打つ頃の河原は渡り鳥たちの格好の休憩場所になり、多くの野鳥に出会える。



●マガモ

～冬～

カムチャッカ半島やシベリアの遠い北国からカモ類やハクチョウなど冬の使者が飛来する。カワアイサやマガモが群れをなして信濃川の水辺に降り立つ。その上空には天然記念物のオジロワシのつがいを見ることができる。

# 信濃川高水敷と野鳥



東に当間山を主峰に魚沼丘陵が連なり、西には東頸城丘陵が緩やかに尾を引く十日町盆地の鳥類は、これまでの記録を含めて138種類をかぞえる。

信濃川とその水辺は水鳥の生息場所の中心となっており、四季おりおりに飛来する野鳥が80種を超す。冬はハクチョウをはじめ、多くのカモ類が飛来し、天然記念物のオジロワシが毎冬飛来、越冬する。

夏はコチドリをはじめ、カワセミ等の繁殖が信濃川の河原や岸辺で行われている。

春・秋には旅の途中で渡り鳥が休息していくため、ことのほか野鳥が多く、ハヤブサなど30種以上が観察できる。



●コハクチョウ

発行：水辺の楽校活用協議会

監修：樋熊清治（信濃川河川環境保全モニター）  
古沢昭三（十日町野鳥の会）

協力：国土交通省北陸地方整備局  
信濃川工事事務所

写真協力：黒島善助（十日町野鳥の会）

# 案内図 (野鳥・植物案内コース)

